

数日後

明転するとベンチに内藤が座っている

内藤 「ほら一樹、砂場でうんこしないーおまえは猫か？ほらパンツあげてー！」

そこえーマー君がやってくる

マー君 「こんにちは！」

内藤 「マー君！」

マー君 「どうもお久しぶりです……」

内藤 「本当に久しぶりですね？どうですかその後？彼女できましたか？」

マー君 「えっ？……彼女ですか？……」

内藤 「振られまくってるんですね……」

マ〜君 「なんでです？」

内藤 「いや、なんとなくですけどね……ほら、マー君って惚れやすいといいますがちよっ

との事で女性の事好きになっちゃうじゃないですか？マーそれだけピュアだという事な

んでしょうけどね」

マー君 「ピュアですか……」

内藤 「え〜。まー……」

マー君 「もうね、彼女を作るのは諦めました。というかやめました。」

内藤 「えっ？諦めちゃダメだって、本当に自分にピッタリの人がいつか現れるから、それ

を信じて頑張ってよー！」

マー君 「……実は鹿児島に帰ることになりましたね」

内藤 「えっ？」

その時内藤の携帯がなる

内藤 「あつちよつとすいません。はいもしもしパパですよ〜！……えっ？今日？……

今日はほら、お前の誕生日だから手巻きだろ！ママもお刺身買いに行くって言っ

てたぞ！……え？すき焼きがいい？……なんで？……うん……

うん……わかったジャーすき焼きにしよう！……大丈夫だよ！……だったら

すき焼きと手巻き両方やればいいじゃないか！今日はお前が誕生日だからお前が

好きなもの食べていいんだって！……じゃーな、なるべく早く帰ってこいよー！」

内藤電話を切る

マー君 「今日娘さんの誕生日なんですか？」

内藤 「そうなんですよ！なんかタツ君と別れたみたいですね、もうダイエットなんかやめた、思いっきり肉食べてやるって張り切っていました。」

マー君 「別れたんですか……。」

内藤 「はい、なんでもねズンバの大会で中国行くのに、何人も女の子に声をかけてたらしいんですよ！そんな軽薄な男こっちから願ひ下げだと言って振ってやったらしいですザマーみるって言うんですよね！やっぱり男っていうのはこうと決めた人を一生守ってやるという気持ちで愛し続けないとね！彼女がいるのに、そんなぼんぼん誰にでも声かけるなんてね？そういうことしてるから一番大事な人にあいそつかされるんですよ……。」

マー君 「きっとタツ君は一人で行くのが寂しかったんじゃないですか？なんとなくその気持ちもわかりますけどね……僕も反省しないと……。」

内藤 「あついや、マー君のことを言ってるわけじゃないですよ！」

マー君 「いや、僕もポンポン声かけてましたから……そうですね、一番大切な人を見失っちゃいけませんよね！うんこれで鹿児島に帰る決心ができました」

内藤 「ん？」

マー君 「元々転勤でこちらに来てただけですからね、もう5年経ったし、そろそろ地元に戻りなさいと、この前辞令ができてね。で、明日の朝、戻ります！」

内藤 「そうなんだ……さみしくなるね……。」

間

内藤 「！こら一樹！何度も入ってるでしょ！女の子の後ばっかりついて歩くんじゃないよ！」

マー君 「あっ、内藤さん、一樹君、気をつけたほうが良いですよ！僕の子供頃にそっくりです

から……行動が……。」

内藤 「……。」

マー君 「では失礼します。」

内藤 「元気でね」

マー君 「僕も久しぶりに、息子と、嫁とのんびりできるから楽しみにしてるんです？」

内藤 「えっ？今なんて？」

暗  
転

完